○狂言→連歌

『兼載独吟百韻』（一五一〇年以前）

ほころびがちにみゆるかみしも

主殿と狂言ながらむしりあひ

いそひで鳥をくはんとぞする　↑　〈雁（がん）盗人〉＊

＊遠国の大名、太郎冠者に肴を買いに行かせる。冠者、初雁を予約して帰る。主従、金策に一計を案じ、店の前で空喧嘩をする。その紛れに冠者に雁を盗ませる。

慶長古活字版『犬筑波集』

下手猿楽に似たるばけ物

拍子にも合はぬ狸の腹鼓　↑　〈狸腹鼓〉＊

＊尼に化けた狸、猟師に殺生をやめるよう約束させる。犬の声に怯え正体を暴かれ、腹鼓をして命乞いする。

〈参考文献〉

・林屋辰三郎『中世藝能史の研究』岩波書店、一九六〇年

・小西甚一『能楽論研究』塙書房、一九六一年

・『図説いけばな大系6　いけばなの伝書』角川書店、一九七二年

・日本思想大系『中世政治社会思想 上』岩波書店、一九七二年

・鶴崎裕雄「当麻寺奥院蔵『十界図屏風』と連歌会図・花の下連歌」（『藝能史研究』第一四一号、一九九八年）

・日本思想大系『中世政治社会思想 下』岩波書店、一九八一年

・橋本朝生『中世史劇としての狂言』若草書房、一九九七年

・網本尚子「連歌を詠む狂言」『文学 隔月刊』第三巻第二号、二〇〇二年

・島津忠夫「芸能性と文芸性と」（『島津忠夫著作集第二巻 連歌』和泉書院、二〇〇三年。初出一九六四年）

・大谷節子『世阿弥の中世』岩波書店、二〇〇七年

・神津朝夫『茶の湯の歴史』角川書店、二〇〇九年

・鶴崎裕雄「見られ聞かれる連歌―連歌帳行の本質―」（『藝能史研究』第二〇三号、二〇一三年）

〈付記〉右に掲げたのは、当日の配布資料である。このような形で原稿化されることを想定していなかったものであり、整理のゆき届いていない点、お許しいただきたい。講演の際には、絵画資料を併用しながら、連歌においてどのような点で演劇性が問題となるのかを中心に話をした。

うにたく也。乍去、四季・恋・雑の口伝あり。

（香は、先に焚くからといって賞美されるものではない。後から焚くほどに、熟考や工夫が必要となるものだ。その点で、相撲や仏法の問答と同様だ。洗練された香とは、先に焚いた香との関係で違反にならぬように焚くものだ。そこには、四季・恋・雑の分類に関する口伝がある。）

→＊「指合」は連歌用語で禁止事項を意味する。

資料３　群飲佚遊

『建武式目』

一　群飲佚遊を制せらるべき事

…或は茶寄合と号し、或は連歌会と称して、莫太の賭に及ぶ。その費勝計し難きものか。

「二条河原落書」

此比（このごろ）都ニハヤル物、夜討強盗謀綸旨（にせりんじ）、…京鎌倉ヲコキマゼテ、一座ソロハヌエセ連歌、在々所々ノ歌連歌、点者ニナラヌ人ゾナキ、譜第非成ノ差別ナク、自由狼藉ノ世界也、犬田楽ハ関東ノ、ホロブル物ト云ナガラ、田楽ハナヲハヤル也、茶香十炷ノ寄合モ、鎌倉釣ニ（ママ）有鹿（ありしか）ド、都ハイトヾ倍増ス、…

資料４　笠着連歌

国立公文書館蔵『筑前歳時図記』（筑前地方の年中行事につき絵をまじえて解説。江戸中期か）

六月二十四日／太宰府／笠着連歌

菅神広前の廻廊にて、別当・神人、列をたゞしふして法楽の連歌を興行す。此日は参詣の貴賤、其所に立よりて句をつらねいひ出る事をゆるす。宗匠、其秀逸を撰み、是をかくて神前にさゝぐ。参詣の旅人は、笠をもとらで句を考ふるによりて、笠着の連歌とはいへり。

資料５　狂言と連歌

橋本朝生「狂言と俳諧連歌」（同『中世史劇としての狂言』Ⅲ一）

○連歌（俳諧連歌）→狂言

・連歌の流行を背景とするもの

〈箕被〉〈連歌盗人〉〈察化〉〈千切木〉〈千句〉〈連歌十徳〉〈鹿ぞ啼く〉

・俳諧連歌が着想の因となっているもの

〈八句連歌〉〈竹の子〉〈芥川〉〈岩橋〉

・部分的に俳諧連歌を利用するもの

〈酢薑〉〈ほうじょう〉〈富士松〉

侍公（救済）は、いづれの躰をも捨てざりけれども、ただ思ひ入りて、いか程もしほれたる所に心をかけ侍りけるやらん。荒れたる宿の築垣も、傾く軒の檜皮は忍忘（草）など茂く、春の月の朦朧たるが御簾のひまよりほのぼのとさし入りたるに、はしちかくは人の音なひもなきやうに句を作侍りしなり。

○謡曲↓連歌

荒木田守武『守武千句』第一

25　将棋さすののみや人に雨ふりて

26　をして吹く也もりの木枯

謡曲「野宮」

ワキ　野の宮の　森の木枯し秋ふけて　森の木枯し秋更けて　身に沁む色の消えかへり　思へばいにしへを何としのぶ　の草衣

資料2　茶・花・香

『山上宗二記』（茶湯伝書。一五八八年成立）

古人のいはく、茶の湯名人になりての果ては、道具一種さへ楽しむはいよいよ侘数寄が専ら也。心敬法師連歌の語にいはく、連歌の仕様は枯れかじけ寒かれと云ふ。この語を紹鷗、茶の湯の果てはかくの如くありたきものを、など常に申さるるの由、辻玄哉語り伝へ候。

（昔の人はこう言った、茶の湯の名人ともなると、究極には道具一つを楽しむにも、いよいよワビや数寄の精神一筋となる、と。心敬法師が連歌について語ったことばにも、連歌の様は枯れ、かじけ、寒くあれ、と。このことばをもって、武野紹鷗は茶の湯の究極はかくありたきもの、と常々述べておられた。かように、辻玄哉は語り伝えておりました）

『仙伝抄』（立花伝書。一五三六年頃成立）

一　連歌の花は、発句を聞たらば、其躰にたがはざる躰に立べし。若聞ずは、松をしんに立て、下草に当季のものを用ゆ。すがた異曲なるは、よろしからず。

（連歌の席で立てる花は、発句を聞いたならば、その発句の内容に背かぬように立てるのがよろしい。もし発句を聞いていない場合は、松を心（真？）に立てて、下草にはその季節のものを用いる。花の姿の異様なものはよろしくない。）

『烏鼠集四巻書』（茶湯伝書。室町末の内容を伝えるか、慶長写本）

一　香は先にたくとて賞翫にあらず。後にたく程思惟工夫ある也。すまう、法問の如也。銘香は初のに指合ぬや

「中世藝能と連歌」

熊本県立大学文学部　**鈴木　元**

資料1　能と連歌

○連歌→謡曲

謡曲「三井寺」（一四五六年以前成立）

ワキ「これは江州園城寺の住僧にて候　またこれにわたり候ふ幼き日とは　愚僧を頼むよし　仰せ候ふ間　力らなく師弟の契約をなし申して候　また今夜は八月十五夜明月にて候ふほど　に　幼き人を伴なひ申し　皆々講堂の庭に出で　月を眺めばやと思ひ候

類ひなき　名をもちづきの今夜*とて　名を望月の今夜とて　夕べを急ぐ人心　…

地（地謡）月は山　風ぞ時雨に鳥の海**　風ぞ時雨に鳥の海　浪もあはづの森見えて　…

＊『菟玖波集』巻二十

八月十五夜に

たぐひなき名をもち月の今夜かな　関白前左大臣（二条良基）

＊＊『石山百韻』（一三八五年成立）

賦何船連歌　至徳二年十月十八日　於石山寺倉坊

月は山風ぞしぐれにほの海　良基公

○連歌→能楽論

世阿弥『風姿花伝』第三篇（一四二三年頃成立か）

◆されば、遍くものまねごとに無しとも、一方の花を究めたらん人は、しほれたるところをも知ることあるべし。しかれば、このしをれたると申すこと、花よりもなほ上のことにも申しつべし。花無くては、しほれどころ無益なり。…

（とすると、すべての物まねごとに花を極めていなくても、ある一方面の花を極め尽くした人は、しおれている境地をも自得することがあるであろう。そうしたわけで、この「しおれたる」という風趣は、花よりももっとうえの境地と言ってもよいだろう。だが、花がなくてはしおれていても役に立たない。…）

◆二条良基『連理秘抄』

詞利きの句は、如何にもしみじみとしほれたるようにて、付けよく、おもしろく思ゆるなり。

◆『梵灯庵主返答書』